

まえがき

当山円通寺は、浄土宗鎮西流名越派の大本山で、全国に五百余の末寺をもち、正親町天皇の勅願寺の名刹であります。

浄土宗名越派は、善導寺流または大沢流とも呼ばれましたが、これは、この流派を開いた良弁尊観上人が、相州鎌倉の名越谷に善導寺を創立して教義を伝導したことから、善導寺流と呼ばれ、また、後世、名越派が繁衍盛行する基礎を作ったのは、当山を開いた良栄上人の功績によるので、上人の住地下野の大沢の名をとって、大沢流とも呼ばれたのであります。

そもそも、浄土宗は、平安朝の後期、後白河法皇の承安五年（一一七五）三月に、法然上人の開かれた他力易行の民衆済度を教義とする仏教であります。法然上人には、浄土真宗（一向宗）を創めた親鸞上人をはじめとし、鎮西流の聖光上人、長楽寺流の隆寛律師、西山流の証空上人、九品寺流の長西上人、一念義の幸西上人など、民衆的布教家として高名な門弟がおりましたが、法然上人の心にもっとも適った門弟は聖光上人で、この人が浄土宗の正統を継いだのであります。

聖光上人は、仁孝天皇の尊敬をうけ、大紹正宗国師との諡号をもらっておりますが、一般に、鎮西上人と呼ばれ、その教義を鎮西流といいました。上人の生地が筑前香月であったためであります。

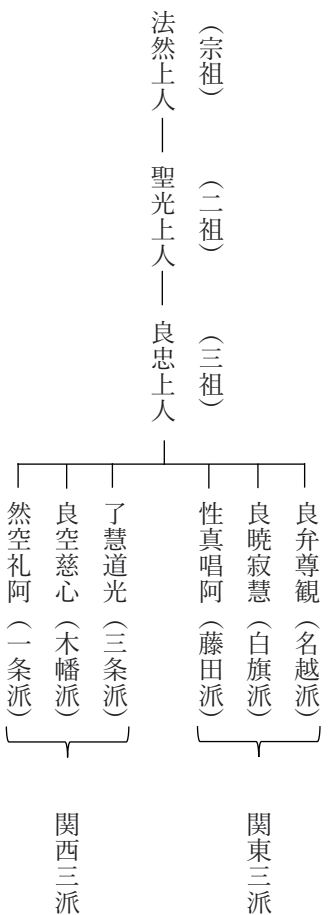
名越派は、この鎮西流の流れをくんでおりますので、浄土宗鎮西流名越派といわれております。

鎮西上人の門弟に、良忠上人という偉い方があり、たくさんの著述を遺しました。それらの著述は「報夢抄」と呼ばれております。良忠上人は、伏見天皇から記主禪師と諡名されました。なお、この良忠上人が二祖聖光上人の後を継いで、浄土宗の正統三代目となりました。

浄土宗の正統三代目となりました。

良忠上人の門下から六人の俊才が輩出しました。すなわち、尊観、寂慧、性心、道光、慈心、礼阿であります。この六人は、関東、関西にそれぞれ一派を開き、記主門下の六派と呼ばれております。

これを系譜に示すと、次のようになります。



こうして、この六派が関東と関西で、それぞれ自派の教義繁術をしたのでありますが、まもなく、関東の藤田派が衰え、ついで関西の三派も勢力を失い、名越、白旗の二流だけが残りました。なぜ二流だけが存続したか。理由は簡単です。名越派には良栄上人、白旗派に誉聖上人という自派の教義の偉大な継承者がいたからであります。バンコ大川文は、以上のことが三才図会という書物の中に、次のように記録されております。その「天照山光明寺」の項に、

良忠ノ弟子六人分レテ六派ヲ為ス。京都ニ三箇寺有り。一条礼阿、三条道光、木幡慈心ナリ。関東ニ三箇寺有り。白旗寂慧是レ乃チ光明寺ノ第二世ナリ。尊観是レ乃チ大沢流義ノ祖ナリ。持阿是レ乃チ藤田流義ノ祖ナリ。而シテ白旗、大沢ニ二流今尚盛ニツテ四派今断絶ス。

とあり、この白旗と大沢すなわち名越の二流が明治九年に合流して、今日の単称「浄土宗」となったのであります。この三才図会の中で「尊観是レ乃チ大沢流義ノ祖ナリ」といって、名越派の祖といわなかったことは、名越教団における良栄上人の法勲の大きさを示しております。さらに、白旗派の誉聖上人と名越派の良栄上人について、その略伝集に、

誉聖ハ額ニ半月ノ人形アリ。理本（良栄）ハ胸ニ半月形アリ。両師ハ文殊、観音ノ化身ニシテ悲智双行ノ徳タルヲ見ル可シ。

とありますが、文殊、観音の化身とまで称えられた名僧が、同時代に二人も現われたわけですから、しかも二人とも半月の形を額と胸にもっていたとは不思議なことであります。

こうして、白旗派と、名越派すなわち大沢流の二派が末永く栄えて、明治九年に合流して今日の「浄土宗」となったのであります。

これで、当山の開山上人の浄土宗史上の地位が、はばお分りになったかと思えます。

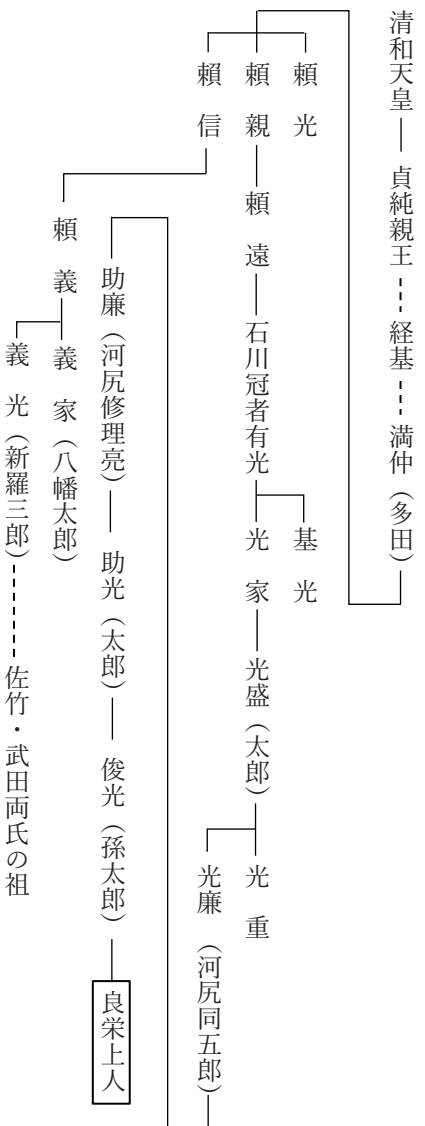
以上を、開山上人伝を記述するにあたっての緒言といたします。

一、姓氏郷関

当山円通寺の開山良栄上人は、蓮社号を高蓮社、字を理本といい、後世、宗徒は尊称して、栄師、本公、あるいは鈔主、または五祖上人などと呼んでおります。栄師とは良栄師のことであり、本公は理本公、鈔主というのは、浄土宗の三祖良忠上人に「報夢鈔」という浩瀚な著述があるために、天皇から記主と諡名されたことにちなんで、良栄上人にも「大沢見聞」の十六部九十五卷付切紙二通の鈔物見聞の大著述があるので、鈔主の尊称が生れたのであります。五祖上人というのは名越派の始祖良弁上人から五代目の師ということでもあります。

良栄上人は、奥州磐前郡小川里の生れと伝えられております。ほかに奥州信太郡川又村の生れ、また下野の人との説がありますが、この二説には信憑性がありません。

良栄上人は清和天皇（源氏）の後胤で、「大沢山虎溪院円通寺略縁起」に、その系譜が示されております。



良栄上人は、後村上天皇の貞和三年（一三四七）河尻孫太郎俊光の嫡男として生を享けました。幼名を光丸といたしました。はじめ嫡子の無かった俊光は、妻と共に近隣の石森山（磐城富士）の観音に十七日の祈願をし、満願の夜、瑞験を感じて妻が身籠り、月満ちて生れたのが光丸後の上人であります。その時、室内に皎々と光が満ちていたので、光丸と名付けたと前記の略縁起が伝えております。また、光丸の顔かたちは玉のように輝き、両親は、観音のお恵みと思つて、光丸を養育しました。

上人の出生日については、暦応四年説、康永元年説、応安六年説、貞和三年説、建武三年説など、文献によってまちまちであります。当山に遺っている上人自筆の題額集別紙の奥書に「時に永徳元年辛酉十月八日書畢、良栄生年三十五」とあるところから逆算して、貞和三年説が正しいことが分かります。

二、出家受法

良栄上人は幼時から孝道の志厚く、日夜、父母を敬順していました。ところが、上人七才のとき、父母が相ついで死去したため、世の無常を感じ、遁世のころざしを立て、仏門に入る決意をして、良尊喜円上人の門に入り、剃髪出家し、良栄理本と得名いたしました。師の良尊上人は名越三祖と仰がれる良山上人の高弟であります。

なお、良栄上人の出家の動機や年令についてはいろいろの説がありますが、幼少の頃であったことには間違いありません。

良栄上人は、延文四年（一三五九）、早くも十三才のとき、師の良尊上人から果分不可説の相伝を受けました。果分不可説の相伝というのは、名越派のもっともたいせつな相伝であります。

名越伝法においては、古来、その伝授規則につきのように定めてあります。

一、先づ開ク時ハ（筆者註・月形函）七日精進、或ハ三日沐浴結齋シテ後、重書ヲ開ク可シ。

一、初メヨリ次第二開ク時ハ神祇講式妙覚心地祭文ヲ読ム可キコト。

一、志ノ浅深ニヨツテ許セヨ。但シ師ニ向ヒテ不幸ナラバ許ス可カラズ。

一、相伝ノ後三年、外へ往キテ談義スベシ。三年過ギテ後師ノ所ニ還ヘリ、法門ノ不審ヲ明

メテ後重ネテ口伝在ル可シ。然リトイエドモ留箭ノ口伝免許ハ且ツ出ス可カラズ。是レ

其ノ志ヲ見ル。志ナキ者ハ師ニ向ヒテ不幸ナリ。（果分述伝集）

このように果分不可説の相伝を受けるのは容易なことではありません。初めに師の許可があつて、月形伝書の一般相伝を受けてから、三年の間地方に伝道して談義し、宗義の研鑽に努めた上、ふたたび師の許に帰つて、法門の不審を究明した後に重ねて「口伝」があるわけでありませす。しかし、これだけでは留箭口伝の免許は許されませす。留箭口伝というのは、実にこの果分不可説の口授相伝のことです。

良栄上人は若年の身で、師の良尊上人の許で留箭口伝の免許をうけ、同門の兄弟子たちを凌駕して不世出の法器たることを実証しました。まもなく、師の良尊上人は、この英才をいつまでも手許に置くべきではないと考えて、上人を同門の法兄良天上人に託しました。

良天上人は字を聖観といい、名越派祖良弁上人から数えて、良慶、良山、良天とつづき、後世、名越の四祖と仰がれる大徳であります。当時は、奥州檜葉郡折木という所に、成徳寺を創立して、講義所を開筵し、さかんに所承の義を宣伝して、広く世に知られた名僧であります。

上人が良尊上人の許を離れて四祖良天上人の門に入る前に、祐誠上人について受法したとの説があります。祐誠上人は、良尊上人や良天上人と同じく、三祖良山上人の門下で、師跡の如来寺本山を継いだ方です。また、ほかの一説には、はじめ、三祖良山上人について受法したが、三祖の遷化（死亡）に遭つて、法兄である四祖良天上人に師事したといわれますが、確たる証拠はありません。しかし、三祖や四祖に師事したり、祐誠上人との交遊など、年代的にみて妥当のように考えられます。

これらのほかに、剃髪の初め、鎌倉光明寺において修業したとか、京都の浄華院八世敬法の門に入ったという説もありますが、真疑は今後の研究調査に俟たねばなりません。

いづれにしても、上人は、各地の名僧碩学を訪ね、あるいはその門に入って教えを乞い、あるいは論議をたたかわして、自流ばかりでなく、諸宗異流の学を研鑽尋究されたことは事実であります。浄土列祖伝の上人伝には、「人と為り諸師を漫遊し諸宗を錯綜す」とあり、東暉の大沢縁起には、「諸国を遍歴し多くの名匠を訪ね大小権実ことごとく通達す」とあります。

さて、上人は、四祖良天上人の許で宗乗、余乗を学ぶこと二十有余年、その間、師に常隨給仕して資師の美を済したのであります。かくして、永徳元年（一三八一）、良天上人から一器の水を一器に移すごとく、流義の奥旨をことごとく相承して名越正統五祖の印許を受けたのであります。時に、上人三十五才でありました。四祖良天上人は上人に向って、

「汝ハ実ニ弘法伝燈ノ法器ナリ。是ヨリ広ク衆生ヲ度スルタメニ諸国ヲ遊履シテ必ず倦ムコトナカレ」

と、懇切に示諭されたと、略縁起に記載されてあります。

三、伝道弘法

当時、名越派は、派祖良弁上人の開派以来、四代、およそ七十年の歳月が流れています。派勢は未だ奥羽の一角に止まり、既成の諸宗教団からみれば、比較にならない微々たる存在でありました。したがって、上人の双肩には名越派教団の基礎づくりと、さらに、世に名越派の教義を弘通すべき重い責任のしかかっておりました。

師の良天上人の許を辞し、いよいよ負荷の大任に應えるべく、諸国伝道の旅に出た上人は、まず、旧師の良尊を、その董地下総香取郡上小堀の浄福寺を訪ね、旧師に対して心から久濶を述べました。浄福寺は記主禪師（良忠上人）の創建にかかり派祖（良弁）、二祖（良慶）、三祖（良山）もかつて董職した名刹であります。上人の来訪に落涙して喜んだ旧師の良尊上人は、日常拝跪珍重する日本四十体の一体である善光寺如来の模像を、上人に贈って門出を祝しました。

旧師の変らぬ愛顧に感激した上人は、その仏像を笈に納め、杖を曳いて北に向って伝道の旅に出ました。奥羽に入った上人は、仙台、盛岡、会津、秋田、山形と、各地に多くの教蹟を残して、後世、円通寺本山の勢力地盤を築き上げました。陸前登米郡佐沼の安楽寺は、この時、上人が開基した寺院であると伝えられております。

上人の著書伝通記見聞によると、至徳二年（一三八五、上人三十九才）の正月頃は、岩城矢ノ目の如来寺に足を留めて、盛んに教網を張っておりました。如来寺は三祖良山上人の開基で、当時、名越派随一の談林でありました。上人は、この如来寺で、教化のかたわら、前記の伝通記見聞二十五巻の大作を完成いたしました。この書物の奥書きに

「茲ニ伝通記見聞畢ル。最極ノ秘書ナリ、他見ニ及ブ可カラズ。秘ス可シ云々。千金ト雖モ是ヲ伝フル莫シト謂フノミ。聚集沙門良栄ハ後学ノ為メニ相伝ヲ拾フテ之ヲ書ス。見ン人ハ御訪ネ有ル可キ者哉」

とあって、上人がこの書の著述に当たつての情熱と氣迫を窺うことができます。

如来寺を去つてから、上人は折木成徳寺にいたり、師跡を継いで成徳寺二世を董襲し、寺域を拡張し、寺觀を一新しました。このことは成徳寺文書にはつきり誌されており、後世、円通寺、専称寺、如来寺と並んで、成徳寺は、名越四本山の一つに数えられました。

まもなく成徳寺を、法弟であり、上人にも師事した良寂に譲つた上人は、下総方面に飛錫し、まず香取郡小見川に参りました。小見川には、派祖尊弁上人の門弟境智上人の開いた光源寺があり、すでに廃絶していましたが、上人は、これを立派に復興しました。思うに、当時、近隣の上小堀に浄福寺が在り、そこに旧師の良尊上人が存在していたので、思慕の情抑えがたく、下総勸化の第一歩にこの土地を選んだものと思われまます。

こうして復興した光源寺を、やがて、上人は弟子の良可に譲り、旧師良尊上人の後を董襲して浄福寺八世となりましたが、さらに教足を伸ばして、北相馬郡立木に円明寺を、印旛郡坂戸に西福寺を開山して、常総一円に教網を拡張いたしました。

また、撰門の縁山志によれば、そのころ、武州桜田に光明寺を開基しました。武州桜田は現在東京の桜田門あたりと思われまます。

ここで、右に挙げた二・三の寺院について説明を加えておきます。浄福寺は、その後、寺地を下小堀に移しました。現在の千葉県香取郡豊浦村下小堀の浄福寺がそれでありまます。寺地の移転の年代は不明ですが、元の寺地は、現在の上小堀字駒形五七三番地、山林一反二畝二十歩（約一千平米、産土神駒形神社裏北方）、現在同所、寺島氏所有地付近であります。

安楽寺は文化三年三月（一八〇六）、火災に遭い、以後無住となり、しばらく同町松栄寺の兼掌になっていましたが、明治三十六年ついに同寺に合併されました。

光源寺は、大貴山西城院と号し、第三十三世まで存続いたしましたが、明治九年、廃寺となりました。

桜田の光明寺については、縁山志巻一に、つぎのように述べてあります。

「光明寺といえるは、浄土宗良栄上人の開基にして、桜田にあり。後、三河国より一向宗の僧来りて改派し、いま、西久保にありて西本願寺に属する。

四、舟橋談所の開筵

常総の地を巡錫し、自義を宣伝し、寺院を開基し、廃寺を中興したりして歳月を経てから、良栄上人は、ついで下野に歩を向け、太平郷舟橋に舟橋談所を開筵いたしました。

この舟橋談所につきましては、現在、当山に秘蔵されている「月形函」の中に、三祖良山上人の誌した「題額集別紙」という著書を、当山六世の良順上人が写した文献が所蔵されてありますが、その奥書きに、つぎのようなことが記録されています。

「本云、応永二年南呂良勝三十一、於野州太平舟橋談所写之、干時文明十九年丁未春、良順三十五才、於称念寺校之」

これによると舟橋談所は応永二年（一三九六）には、すでに開筵されて、数多の僧徒が輻輳していたことが分ります。また、ここで舟橋談所とっているのは俗称で、虎溪院というのが正しい称呼であります。

良栄上人は、この虎溪院において廬山の遺風を慕い、善導の遺教を執事し、六時の勸行怠りなく、連日、称名を専修するとともに、余暇を得ては、盛んに講筵を張って自義を宣伝し、教学の大成に努力いたしました。

応永七年（一四〇〇）、上人は、ついに「浄土十六箇条問答見聞」七巻を祖述いたしました。時に上人五十四才。

この書は、派祖による名越派開蘭の宣言書である浄土十六箇条疑問答一卷を細釈したもので、名越の正義を高唱し、白旗の邪説を痛烈に論難破釈したもので、その論ずるところ、条理整然、思索深遠、傍証適確であつて、まことに名越教学史上、特筆大書すべき珠玉の文献であります。

この著述をするに当つて、上人が、きわめて慎重な態度であつたことは、「良栄夢想」の中に示されてあります。すなわち、

「十六箇条ヲ記録セント欲シ、先ヅ題名ノミヲ記シ置キタル其ノ夜、夢寐ニ、黒衣ヲ着玉ヘル老僧一人来タリテ、愚僧ノ手ヲ取り、書ク可キ旨ヲ教ヘ玉ヘリ。誰シ人カヲ問ヒ奉ルニ、傍ノ人答ヘテ曰ク、是レ黒谷ノ法然上人ナリト申ス。愚僧思フ、然阿上人五十余帖ノ抄記ヲ記シ始メ玉ヘル夜、夢中ニ黒谷上人来リテ、然阿上人ノ手ヲ取りテ教ヘ玉ヘリト伝承ス。今モマタ是ノ如シ。是ノ事ノ不思議サヨト喜悦ノ心ニ住スト思ヘバ、夢タチマチ醒ム。云々……夢覚メテ後ニ、夢ニ虚実アラバ如何ト思ヒテ打チ置ク。師良天ニ語り申セバ、実夢ナルガ故ニ末代ノ為ニ見聞ノ奥ニ書ス可シ、ト仰セラレタルガ故ニ記シ畢リヌ。良栄印」

つぎに、上人の舟橋在住時代の事蹟で、もつとも有名なことは、栄問二師（良栄上人と聖尚上人）の交遊の物語りであります。前にも述べておきましたが、名越派と同じく、浄土宗鎮西派の流れをくむ白旗派に了誉聖悩上人がいます。この聖悩上人は、武州小石川伝通院を開山した方です。

良栄上人と、たまたま隣境の大羽にある地藏院に来錫していた聖問上人が、来往懇談、おお

いに親交を温めたと伝えられております。このことに関して、略伝集には、つぎのように述べてあります。

大羽村地藏院南龍坊舎堂ニ、高僧ノ住スルアリ。了誉ト曰フ。理本ト共ニ来往佛法ノ奥旨ヲ対談シテ積然タリ。理本ハ了誉ニ贈ルニ諸見聞述作数十部外数部ヲ以テン。之ヲ運輸スルニ牛背ヲ以テス。然ルニ途上坂路險阻ニ会ヒ、牛忽チニシテ倒臥ス。両師早ク己ニ之ヲ知り、数人ヲ遣シテ追逐シツイニ大羽郷ニ至ル。是レヨリ此ノ坂ヲ号シテ経坂ト曰フ。今ニ現存ス

この物語りは、略伝集以外の文献にも見られます。また、経坂の地名は、今も京坂の名称で残っております。

聖岡上人が大羽の地藏院に来たのは、前後二回となっておりますが、大島泰信氏の浄土宗史によると永和四年（一三七八）以前と、永徳三年（一三八三）以前となっております。東京小石川伝通院の間師五百年遠忌準備局で、大正八年五月十一日出版の「聖岡禅師」に示されている年譜によると、永徳二年（一三八二）と、明徳三年（一三九二）となっております。

虎溪院の敗地や堂宇は、現在、同所の滝沢氏が相続所有しておりますが、これは、滝沢氏の祖先小滝氏の寄進によるものと伝えられております。なお、滝沢氏は、明治維新までは代々小滝惣右衛門を名乗って、土地の名家でありました。

五、円通寺の創建と大檀那益子氏

応永九年（一四〇二）、良栄上人は、大経鈔見聞七巻を著わしましたが、これは望西見聞とも呼ばれているように、記主（良忠上人）門下六派の一つ、三条派の祖である望西楼道光の著「無量寿経鈔」を註釈したものであります。

この年、大沢の領主大沢八左衛門尉の帰依によって、大沢御座内に、寺地として山林田畑十五町二反歩（約十五万平米）、経読田八反歩（約八万平米）の寄進があったので、ここに大伽藍を興建して、大沢山虎溪院円通寺と号しました。これが当山のはじまりであります。

伽藍建立に当っては、とくに、紀党の旗頭益子氏一門をはじめ、隣郷近郷の豪族が進んで檀那として支援し、数年にして、広大な寺域に輪輿の美まばゆき伽藍の出現となったのであります。

上人が円通寺を建立した目的は、真の仏道弘通のため、当山をもって名越派の根本道場とし、一派を総録統掌し、教団の一大拡張を図ることにありました。

ここで、上人の円通寺建立の由来を、略縁起から引用してみよう。

人皇百一代後小松院ノ御宇、応永九壬午年、良栄西明寺観音ノ正験ニ依テ此ヲ創建ス。其ノ濫觴ハ上人関東遊歴ノ初、野州鶏足山ノ麓、舟橋ニ笈ヲ留メ、一字ヲ開キテ虎溪院ト名付ク。此ニ於テ盧山ノ遺風ヲ慶慕シ、善導ノ遺教ヲ執持シ、六時ノ勸行怠慢ナク、連日称名ヲ専修ス。

上人卓然トシテ真宗興隆ノ大願ヲ発ス。西明寺ハ救世観音ノ靈地ナリト聞及ビ、百日百度目参ノ苦行ヲ修セント欲シ、毎日同所独鈷山ニ詣リテ尊像前ニ於テ真宗弘通ノ祈願ヲナス。光陰

矢ノ如ク、日往キ月来リテ百日満ズル白天、觀世音ノ拜前ニ未曾有ノ靈瑞ヲ感得シテ心願成就有難ク、歡喜シテ庵ニ赴歸ス。下向ノ路中、館坂ニ暫ク休息シ、四方ノ空景ヲ速見ス。不思議ナル哉、辰巳独鈷山ノ方ヨリ一聚ノ紫雲飛ビ来リテ大沢ノ別所御座内村ニ大樹アリ、其ノ上ニ光然トシテ止ル。紫雲ノ中ヨリ紫幡一流出デテ下リ、大樹ノ梢ニ懸リ、「大沢山円通寺」ノ文其旗ニ顯然ス。良榮是ヲ明了ニ感見シテ此亦觀世音ノ大悲利物得益ノ道場ヲ今ニ示現ス。誠ニ妙智力ノ功德身根ニ徹シテ有難ク、五体投地礼拝スレバ、幡モ紫雲モ須叟ニシテ飛ビ去リテ、更ニ其ノ相ヲ見ズ。上人歎喜落涙シテ急速庵ニ歸リ、其処ニ至リテ梵宇ヲ創建ス。觀世音ノ所現ヲ以テ即チ大沢山円通寺ト名付ク。

この年、応永九年、上人はすでに五十六才になっております。永徳元年、初めて師の許を辞して諸国伝道の旅にのぼってから、春風秋雨二十二年、舟橋談所を開延してからでも、十有余年の歳月が流れております。思えば伝道開始当時三十余才、血氣潑刺の青年僧も、今や霜髮衰眼の老境に入らんとして、その学解はいよいよ円熟、その徳風は四辺にあまねく、他宗他門の学徒が、陸続として上人の門を敲き、教を請うたと伝えられております。略伝集には、その模様を次のように述べてあります。

理本ノ名愈々署ハル。他門ノ碩徳陸続トシテ理本ヲ訪ヒ、四方風靡セザルナク、猶モ百川ノ大海ニ朝スルガ如ク、衆星北辰ニ向フ。

これら他宗の学者の中には、上人に心服するあまり、改宗して浄土門に帰して、門弟となる者も少くなかったが、それらも、やがて上人の学解徳風に圧倒され、他愛なく屈服して、いたずらに上人の名声を挙げる役割しか果しませんでした。この模様を、

他家諸家論難ノ如クニ起ル。栄方ニ随ツテ弁折無礙ナリ。

と、浄土列祖伝はいい、略伝集には

僧徒之ヲ嫉ムモノアリトイエドモ、ナオ風ノ求羅ヲ増ス如ク専修称名イヨイヨ熾ナリ。

と讚美しております。

さて、ここで、話を変えて大檀那としての益子氏についてお話ししなければなりません。

益子氏は紀党の旗頭として、清原真岡氏と共に、当時、坂東一の弓取りといわれた宇都宮氏の両翼として、紀、清両党の名は、広く天下に謳われておりました。大楠公楠正成をして、

「宇都宮は坂東一の弓矢取なり、紀・清両党の兵、元来戦場に臨んで生命を棄つること塵芥よりも軽くす。其兵七百余騎、志を一にして戦を決せば、相手の兵、ほしいままに退く心なくとも、大半は必ず討たるべし（太平記）」

と讚歎させ、ついに戦わずして退却せしめたといわれております。

益子氏の頭領は、益子喜市郎勝直といい、貞治の末（一三六七頃）からしばらく市塙に居を構えていたが、応永二年（一三九五）に、ふたたび益子に城塞を築いて引き移ったのであるが、翌三年八月十五日、この世を去りました。

当山円通寺の創建に当っては、前に述べたように、大沢氏の寺地寄進という大きな力があつたが、益子氏と当山との関係は、単に寺院と後援者ではなかったのであります。すなわち、晩年の喜市郎勝直は仏門に入り、入道して合群房良覚と号したといえます。この良覚の号から察

するに、単なる信徒ではなく、名越の伝法を授けられたことが明かであります。さらに、勝直の弟は良徳と称して、早くから上人の門に投じて出家しております。

勝直の後を、幼くして継いだ長男の勝貞は、応永十一年（一四〇四）十五才の時、益子独鉾山の峰に、高館城を築いて四隣に武を振いました。応永二十三年（一四一六）の上杉氏憲の禅秀の乱には持氏に味方して、抜群の武功を立て、持氏自筆の感状を受けました。勝貞は、幼少の頃から上人の室に参じて死生の道を究めたというから、武勲も当然のことであつたであろう。

益子氏が、円通寺の創建に当って、大檀那として絶大な支援を惜しまなかつたのは、実にこの勝貞であります。三十九才をもって、この世を去り、当山に葬られました。応永三十五年（一四二八）四月二十八日でありました。この年改元されて年号は正長となりましたが、上人も、同年六月三日に遷化されました。

勝貞の死後、弟の勝秀がその後を継ぎましたが、この勝秀の代に、叔父の良徳が円通寺三代を董襲したので、勝秀はこれを祝して、大沢庄三百反（約三十万平米）を寺領として円通寺に寄進いたしました。

また、上人の門下の良月も益子氏の一族であります。このように、益子氏は単なる大檀那ではなく、代々密接な法縁の關係にあつたのであります。円通寺の創建ばかりでなく、天文十年の火災後の寺地移転による再建に当っては、益子氏無くしては、今日の円通寺は考えられないのであります。

すなわち、円通寺が火災に見舞われ、全山焦土と化したのは、天文十年（一五四一）四月十一日でありました。その時、十世良迦上人が寺域を現在の地に移し、宏壯な大伽藍を造り上げたのであるが、この寺域ならびに付近一帯の山林を寄進したのは、勝秀の養嗣子勝清であります。益子氏系図の勝清の条に次のように記せられております。

勝清実ハ結城上野守政勝ノ次男也。宮内太夫、天文十五年宇都宮貞綱ト合戦而天文十七年益子牢人而下館住、天文二十二年八月十九日卒。五十一才。平享寺殿。円通寺分骨葬。為先祖菩提天文十二年山林併ニ寺地寄付ス。

これによると、勝清は結城氏から益子氏へ養嗣子となつて入つたが、結城氏と宇都宮氏が武威を争つた時に、血縁の結城氏に荷担して、益子氏の歴代恩顧の宇都宮と戦つたために、益子氏を離れて牢人したのであります。なお、文中に明かなように、円通寺に寺地、山林を寄進したのは、牢人する三年前になつております。

円通寺法堂の移転再建には、天文二十二年（一五五三）から永録二年（一五五九）にいたる七年の歳月を要しておりますが、これを物心共に支援したのが、前記の勝清の三男で、当時の益子氏の当主であつた勝宗であります。

ついで天正二年（一五七四）六月二十六日に、円通寺は正親町天皇の勅願所に補せられたが、その時、当山良迦上人の上洛参内に際して、その往還の無事なるよう米配を揮つたのが勝宗でありました。その節、京の公家から、勝宗に贈られた書翰が残されております。

就益子郷大沢山門通寺上洛参内候、然者被補勸願所之由、被成輪旨候条、可被加其旨、御分
別可然哉、恐々謹言

六月二十八日

晴右

益子右衛門尉殿

このように、円通寺の創建から火災後の再建、勅願所の繪旨拝受にいたるまで、益子氏が円通寺に注がれた好意は計り知れないのであります。これは、益子氏の権力の発揮ではなく、仏心の表現であったと見られるのであります。

さきに述べました応永九年創立、天文十年の全山焼失の御座内の法堂というのは現地ではなく、いまの御座内の橋本勝定氏の宅地辺を南限とし、西は現在の小学校、北は高田森之助氏、佐藤芳房氏、東は岩崎岩男氏の宅地に及ぶ広大な地域と考えられます。

すでに申し上げましたように、当山円通寺が正親町天皇の勅願書に補せられ、十世良迦上人が上洛参内したのでありますが、この良迦上人には道残という俊英の門下がありました。道残は然蓮社良智源立と称し、また愚同とも号し、越前敦賀の人でありました。生年は天文五年（一五三六）となっております。

道残は天文十九年（一五五〇）、十五才の時に良迦上人を慕って、越前からはるばる下野に到り、大沢叢林に留学し、良迦上人に師事すること多年、ついに師の上人から円通寺十一代の讓状をうけるに到りました。

道残は、全国周游の途路、たまたま故郷の敦賀に立寄りましたが、故郷の名刹大原山西福寺十四世の亮叡上人の信任をうけ、とくに請われて西福寺十五世を晋董しました。

まもなく、道八の名声が禁裡に達し、天正六年（一五七八）五月、正親町天皇の勅命を奉じて参内、同十年（一五八二）には天皇の学問御指南の繪旨を賜りました。時あたかも戦国動乱の真っ只中で、信長が本能寺に倒れ、山崎、賤ヶ岳の合戦、さらに小牧、長久手の戦いなど、天皇の宸襟一日として寧日なきありさまであった。この時に当り、道残は諄々として天理を説き、仏道を論じて天皇にお仕えしました。ついに天正十四年には紫衣被着の繪旨を拝しました。また、勅命によって京都の大本山清浄華院三十二世に住し、同じく黒谷の大本山金戒光明寺をも二十二世として兼摂いたしました。

かくして道残の声望はいよいよ天下に高く、正親町、後陽成の両朝に亘って帰崇をうけ、両天皇の精神的、学問的支柱となつて、動乱の時勢に皇室を安泰に置いた道残の業績を知る人は少ないが、実に特筆大書すべきことであると同時に、道残を、その年少から薫陶育成した良迦上人の偉業も讃えられましょう。

道残は、天正二十年（一五九二）二月二日、念仏仮名安心抄（和風安心書）二巻を宮中に奉りましたが、惜しくも翌文禄二年九月二十三日、西福寺において遷化し、五十九年の生涯を終りました。

浄土先徳奠香録によりますと、道残は、山城洛北国生寺、摂州真上真如寺、丹波亀山専念寺、広田大恩寺、芸州広島広教寺、同所戒善寺、紀州徳田源正寺、越前筑屋西隆寺、黒谷中長安院など、開寺およそ四十八カ寺におよんだと伝えられております。

六、上人の著述

円通寺創建後の良栄上人は、地方の伝道に出掛けることはまれで、もっぱら、山内に常住して、名越教学の大成のために著述をするか、あるいは、山内に講筵を張って、自義の宣伝、門下の養成にとめました。

上人は、鈔主とも呼ばれていましたが、実に、その名に恥じず、左に掲げるような多くの著述を遺しております。これら十六部九十五巻切紙二通の浩翰な著述は、「大沢見聞」とか「栄師見聞」などと呼ばれ、現在、斯界で珍重されております。

伝通記見聞	二十五卷	刊本現在
安楽集私記見聞	二卷	”
往生要集私記見聞	八卷	”
十六箇条見聞	四卷本・七卷本 本の二本あり	続浄十四所載（四卷本） 刊元現存（七卷本）
決答疑問抄見聞	二卷	不詳
大経鈔見聞（望西見聞）	七卷	刊本現存
法事讚私記見聞	三卷	刊本現存 浄全卷四所載
往生礼讚私記見聞	三卷	”
般舟讚私記見聞	二卷	”
観念法門私記見聞	二卷	”
論註私記見聞	五卷	刊本現存 浄全卷一所載
決疑她見聞	十卷	刊本現存 浄全卷七所載
浄土宗要集見聞（東宗要見聞・鎌倉宗要見聞）	十卷	刊本現存
肝心集見聞	十卷	不詳
諸行心具不定義	一卷	自筆本現存 続浄十四所載
往生十因私記見聞	三卷	写本卷二―三筆者所蔵
授手印口決	切紙一通	写本現存
引導口決	切紙一通	写本現存

これらの著述は、ほとんど舟橋談所や円通寺に在って、彫身鉄骨祖述整理されたもので、名越の教学はここに初めて組織され、大成されたといえるのであります。そうして、これら著述

に述べるところは、十六箇条見聞をはじめ、多く、名越正義、白旗邪説の立場に立った上で、三条派祖望西楼道光や、藤田派二祖持阿の所説を取り入れて、浄土教学を縦横に、研搜、批判、較量、註釈したもので、後世、反対派の白旗の学匠側からも、きわめて珍重敬愛されているのであります。東宗要玄談の著者妙瑞のごときも、上人の著述を見て、その科釈の詳密で精微であることを激賞したあとで、それが名越の正義を高唱している点を、「是れ玉に疵か」と言っているほどであります。

名越学匠の著書は、派祖のものをはじめとして、ほとんど散逸して今日に伝わっていないが、上人の著述が比較的多く今に遺されているのは、名越の本義に反対であるべき白旗派が、瞠目して取り上げたことと、総録所増上寺袋谷の学匠たちの努力に負うところが大きであります。

七、上人の門下

上人の門下は多士濟々であります。当山に伝わる浄土総系図には、左の二十六人の名が挙げられております。

是俊、良伝、良懐、良勝、良哲、良堯、良善、良繼、良述、良日、良文、良光、寂乘、勝榮、良信、良弘、良珍、良嘉、良徳、良観、良朝、良印、祐本、良誉、良帝、良証、

しかし、鶯宿の浄土伝燈総系譜には、同じく二十六人を挙げていますが、右のうち、良弘、祐本、良嘉、良帝の四人の名を欠いて、その代りに、良喜、良諦、良頓、良本が見えています。良嘉と良喜、良帝と良諦は、おそらく同一人と考えられます。また、良願の浄土名越派脈には、二十八人を挙げ、前掲二十六人に、さらに良頓、良透の二名を加えております。

これらのほかに、当山の浄土血脈によると妙慶、良憲の二人、蓮門精舎旧詞によると良冠、興光寺大過去帳によると良納、光源寺過去帳によると良可、袋中が、寛永十五年十二月二十五日弟子の東暉に付属した浄土宗味によると良天同門の良寂も、それぞれ上人に師事付法したことになるっております。

以上に挙げた上人の付法門下の数は三十六人となりますが、これは、今日記録に残されている員数のみで、これらのほかに、なお多数あったことが想像されます。また、これらの中で、良順、良観、良勝、良哲、良嘉、良堯、良徳、良懐、良善、良文の十人は、後世、「栄師門下の十哲」といわれ、さらにこれに良繼、良月、良伝、良朝、良証を加えたのが、「栄師門下の十五人」であります。また、上人付法門下の良寂、良憲、良納らも高名ですが、良寂は四祖門下、良憲は良徳門下、良納は良善門下として、十哲、十五人から省かれております。

以下、栄師門下の十哲について、簡単に説明いたします。

良頓は、相蓮社宥範または慈専と号し、上人に受法後は、生国の奥州東海道に帰り、法叔十声の特請に応じて、岩城専称寺二世を董襲して、寺城を拡張、寺観を一新して後世円通寺と並んで、名越二大本山の基礎を築き上げました。慈専口筆の著述があります。

良観は、行蓮社乗慶と号し、良頓と同じく奥州の出身。応永十四年、磐前郡平窪に安養寺を

開いて、法義を獅子吼したが、後ち如来寺五世通慶覺天の譲りを受けて、同寺六世を任職し、三祖良山上人以来の名藍を復興して、名越四箇本山の基礎を安定した。弟子良弘も有名で、如来寺七世を董襲して、南白土に増福寺を開きました。

良勝は、寂蓮社性音と号し、奥州岩前郡山崎の産。応永十九年、四十八才をもって、上人に先立って死歿しました。学徳の誉高く、上人門下第一等の俊才であり、円通寺の隣村逆川村木幡に慈眼寺を開き、また、その近傍高岡の安樂寺を真言宗から改宗させて中興して、円通寺の末寺としました。

良哲は、純蓮社は仙または純阿と号し、奥州会津の人。初め他宗の学僧であったが、上人の学徳に帰依して、その門弟となった一人であります。上人よりも年長でした。応永三年には、宇都宮領河内郡上小倉に、延寿寺を草創し、ついで下小倉に清泉寺を開き、了祐、教俊、理珍、本通、良智などの有力な門下と共に、この地方に教線を拡張しました。延寿寺は、後世、この地方に十数カ寺の末山を有し、円通寺末として最有力な中本寺となりました。

良嘉は、敬順と号し、奥州東海道の人。もともと、良哲と同じく他宗の学匠であったが、上人に悦服して浄土門に入った。円通寺の隣郷下尾羽（下大羽）に談所を開発して、所承の義を宣べ、光尊、智順、教浄、教尊、乘聖、是珍、祐順、妙春、理判、慈善などの秀才門下を養成した。応永年中に下総古河に宝輪寺を創立し、弟子妙春は武州大里郡用土に心光寺を開いております。

良堯は、舜蓮社聖欽と号し、この人も奥州東海道の生れ。上人遷化の三日前、すなわち応永三十五年五月晦日、多年随従師孝第一の誉をもって、同門の法兄龍象数多ある中を、選ばれて名越正統六代の印璽を帯びて、円通寺二世を董襲いたしました。そのとき、付嘱された上人自筆の譲状には、次のようにあります。（本書写真参照）

大沢山門、通寺譲状之事

右ノ意趣ハ聖欽僧多年ノ佑随ニヨツテ譲与スル所ナリ。誰カ此状ニ背キテ異存ノ義ヲナス可カラズ。若シ違背ノ輩ハ良栄ノ門弟ニ有ル可カラズ。

右此旨ヲ以テ門弟ノ学匠達ハ同心然ル可ク候。

応永三十五年戊申五月晦 良栄（花押）

これによって、上人の歿後は、諸門弟よく良堯の学徳に悦服して之を補佐し、協力一致寺門の興隆に尽したので、寺観いよいよ整え、末山を増加し、寺基ますます強固になったのであります。

良徳は、法蓮社隆本と号し、前に述べたように、雄藩益子氏の出であります。文安六年（一四四九）に二世良堯から譲り受けて、円通寺三世の座に就くと、甥の益子勝秀は、叔父の入山を祝して、寺領の寄進その他の経済的支援を惜しまなかったのであります。大沢文庫の充実と共に、山内に学寮が豊を並べて林立したのもこの時代で、良徳は盛んに講筵を張って法義を弘通しました。撰門の縁山志に、「此時関東ニ浄家ヲ唱へ法義弘通ノ士……大沢ノ流ニハ隆本良徳円通寺ニ張継シ……」とあります。また、良徳の門下は多士濟々で、良憲、良鏝は相次いで円通寺四世、五世を董襲し、良憲は奥州信太郡福島に到岸寺を、良鏝は円通寺近郷に正法寺

を、良調は奥州檜葉に林蔵寺を、それぞれ開創しました。実に、円通寺は、開山良栄上人から、二代良堯を経て、三代良徳の重職時代をもって、経済的に、外観的に、一派の大本山として、まったく完備したといえるのであります。

良懐は、本蓮社岌念と号し、下総の産であります。上人が下総巡錫時代からの門弟で、下野国小栗に称念寺を開いて、所承の義を宣伝したが、応永二十八年（一四二一）には、都賀郡城内宿川原に、同名称念寺を草創しました。これが、現在の栃木近龍寺の前身であります。ついで、良懐は、皆川城内村に、照光寺を開き、さらに、応永三十五年上人遷化の年には、安蘇郡葛生に龍角寺を創立して、北関の地に、盛んに獅子吼しました。

良善は、奥州の人で、おそらく上人が奥州巡錫時代からの門弟と思われます。常に上人に随従して伝道に従事し、下総に於ては、上人の後を継いで、上小堀浄福寺九世を董襲して、鋭意、寺基を拡張し、寺観を刷新して、下総地方の中本寺としました。また、次の十二箇寺は浄福寺末として後世に総括されています。

法雲寺（豊浦村富田）、道慶寺（豊浦村分郷）、浄慶寺、西福寺（下小堀）、本願寺、光源寺（小見川）、願海寺（新島村磯山）安養院（神里村上小堀）、観音寺（海上郡推芝村忍）、薬王寺（山武郡蓮沼村蓮沼）、善福寺、善福寺、宝樹院（廃寺）

さらに良善は、常陸に伝道して、新治郡玉里村に照光寺を、石岡にも同名照光寺を開山しました。寺伝によれば、共に応安七年（一三七四）の開創となっているが、この年代には疑問があります。

良善の許には秀れた門下があり、良珠、聖本、良本、受音、正受、慈俊、良納、良教、祐慶らは、相たずさえて、常総一帯に一大教網を伸張しました。中でも、良珠と良納がもつとも高名で、良珠門下には、良薩、慈慶、良通、通乗、良超、善龍があり、良納門下からは、良持、良快、良善、良光、良察、乗範、慈本が出ております。良納は、良栄上人にも付法し、下野稲葉村福和田に、興光寺、千手院、了性院、の三箇寺を開いて、門下を率いてこの地方に活躍しました。後に興光寺は隣村壬生に移されたが、円通寺関東末中本寺十二箇寺の随一となりました。現在の壬生興光寺であります。

良本は、栄林と号し、常陸小栗の人であります。おそらく、上人が常陸巡錫中の門人でありましょう。法兄良善やその門下と共に、常総の地に活躍し、常陸真壁郡飯田に迎雲寺を開山しました。

以上、栄師門下の十哲について述べましたが、このほかの門弟にも、一寺一院を創建、中興した者があります。たとえば、良月は満蓮社禪本と号し、良徳と同じく益子氏の一族で、円通寺近傍の大平に、安善寺を改宗中興しました。また、良伝は了仙と号し、下野の人で、大宮に光栄寺を開きました。良冠は、伝燈総系譜では良寂門下となっていますが、蓮門精舎旧詞によると、これも上人の弟子で、宝蓮社と号し、奥州檜葉郡大谷村に宝鏡寺を創建しております。

八、遷化

法然上人を宗祖とする浄土宗が、二祖聖光上人、三祖良忠上人（記主）と継がれ、記主門下の六人の俊才が、それぞれ一派を創始したことは、まえがきで申し上げました。さらに六派のうち、関西の三派が衰退し、関東の藤田派も勢力を失い、名越派と白旗派のみが遂年教團を拡張していったのでありますが、名越派は、派祖良弁上人から数えて、良慶、良山、良天と継がれ、ついに、五祖良栄上人に至って、奥羽、関東に跨って、確固たる地盤をもつ有力な一派教團を築き上げたのであります。それゆえに、三才図会という書物の中に、「尊觀是レ乃チ大沢流義ノ祖ナリ」とあるように、名越派すなわち大沢流として受取られております。すなわち、円通寺の在所大沢が、名越派を示す名称に つております。この点から見ても、良栄上人の大徳と事蹟がお分りになるかと思えます。

上人は、名越正統五祖として負托に応えて、燦然と輝く不滅の法勲を後世に遺し、応永三十五年六月三日、当山において、円寂の素懷をとげました。

略縁起には、その臨終時の模様を伝えて詳細であるから、以下これによって当時の消息を偲ぶことにしよう。

四十五年以来ハ耳目矇昧色声分明ナラズ、コレ幻滅ノ至ルトコロ余命アルベカラズト、平日ノ読経、六時禮拜此ヲ除キ、行住坐臥ニ唯称名ヲ専要ニス。

然ルニ五月二十日ヨリ上人日来不食ノ劳増氣ス、此ニ依テ門弟衆座下ヲ離レズ看病アリ、二十三日午ノ刻勢至菩薩来現ス、皆人視ルヤト問フ、門弟衆視ヘズト答フ、上人別シテ高声念仏ス、看病ノ面々御老体高声ハ御体ノ疲レニナルベシト云ヘバ上人日ク、声ト共ニ命終ラバ本望ナリト微笑ス。二十五日辰ノ時空中ニ音楽ノ音有り各聞クヤト問フ、人々聞ヘズト答フ、上人如来ノ利益ヲ心ニ感じテ双眼ニ涙ヲ滿シ仏名ヲ唱フルコト忽然タリ、二十六日耳目分明ナルコト平日ノ如ク見聞シ玉フ、二十八日自然ト高声止ミ微音ニナリ、晦日卯ノ時多年所持ノ如来前ニ此ノ世ノ報恩ノ御廻向アリ、辰ノ時門弟ノ面々ニ遺物ヲ渡サル、十念アツテ別シテ聖欽ニ自ラ筆ヲ取りテ讓状ヲ書シ、多年ノ随從ニ依リ此ヲ授ク、而シテ暫ク睡眠ス、其ノ間ニ看病衆小シ休息ス、御命終モ間近シト人々用意アリ、然ル時異香薰ジテ室内ニ滿ツ、皆人希有ノ心ヲ起シ入報土ノ瑞相ヲ感得ス、上人目ヲ開イテ浄土ノ莊嚴無量ナリト云フ、門弟衆其ノ言ヲ聞キテ歡喜シ感涙ヲ流ス、六月ノ三日卯ノ刻ニ至ル、聖鉄ヲ召サレ虎溪院ニ於テ一七日別業ヲ修シテ書写スル一字三礼ノ阿彌陀經等良天ヨリ付属ノ袈裟持參スベシト云フ、聖欽則チ出品ヲ出シ以テ師前ニ置ク、上人自ラ手ニ二品ヲ以テ頂戴シ、袈裟ヲ身ニ挂ケ、阿彌陀經ヲ合掌ニ持チ、頭北面西シテ亦高声念仏本ノ如シ、門弟替々助音ス、助音ハ大屈ストイヘドモ老体ハ一向ニ怠ラズ、皆人凡人ナラズト智ル、午ノ正中ニ阿彌陀如来数万ノ聖象ト来迎ス、誠ニ声ニ応ジテ即チ之ニ現ズ大悲有難シト、念仏ト共ニ入寂ス、其面相微笑ナリ。看病ノ門弟衆ハ上人御存生中ノ高恩ヲ感じテ落涙止ミ難シ。四日ノ葬式ニハ遺体ヲ舍利トナシ、煙ハ紫煙トナル。民俗群集スルコト市人ノ如ク、渴仰帰依ノ僧種々ノ奇異ヲ見奉ル。

なお、上人の遷化の日と年令については、

応永三十年六月三日、八十二才（東暉の大沢縁起）

応永三十年六月二日、八十二才（伝燈総系譜）

応永三十四年六月三日、八十二才（円通寺蔵浄土総系図）

応永三十五年六月二日、八十七才（略縁起、略伝集）

永三十五年六月三日、八十二才（下野国誌）

正長元年六月三日、八十八才（統宗書記）……応永三十五年に正長と改元。

応仁三年六月三日、八十七才（名越派曇祖）

などと、文献によって諸説があります。卒年に、浄土本朝高僧伝、浄土列祖伝には、七十二才との記載があるが、誤りと思われます。前に挙げた略縁起の記事と、現存する上人自筆の円通寺讓状によって、応永三十五年六月三日が正しいことが分ります。

遷化の寿年については、前述姓氏郷関の中に引用した題額集別紙の奥書から逆算して、八十二才であったことが分るのであります。

あとがき

当山は、かつて諸国に五百八カ寺と称する末寺をもち、江戸時代には十万石の格式をもって幕府に遇された寺院です。八万坪の広大な浄域には、壮麗な七堂伽藍と三十八字の学寮が豊をならべて林立し、大沢文庫としてその名が全国に知られ、学を志す若い人たちが続々と螺集し、「名越檀林」として盛観を讀えられた名刹であります。

ところが、明治維新に際して廃仏棄釈の嵐に遭って、浄域はもとより、寺地のすべてが上知没収され、そのうえ、明治五年六月には不慮の火災に見舞われて、全山焦土と化し、さらに明治九年、白旗派との合同問題からんで、いわゆる名越独立事件が起り、そのため寺域のほとんどすべてを失い、衰亡荒廃の一途をたどり、大正の初期には、ついに「廃寺」という悲しい烙印を押されようとなりました。

この時に当り、先師良持彦立上人が、円通寺第五十六世として特請晋董されて、徒手空拳、当山の復興に粉骨砕心いたし、在職十四年にして書院の新築をはじめ、寺観の整備、経済的基礎の確立を実現し、当山中興の実を挙げるこゝとができました。昭和十四年六月、境内の一隅に建立された「中興記念碑」を見ると、

松風極々 大沢之辺 宗風宣揚 東海之天 と刻まれてあり、先師彦立上人の気概にうたれるものがあります。

先師は昭和十二年一月十五日、七十才をもって遷化されたが、その遺芳を継承して、私は、特別な宗門の試験に合格して、若冠三十才で当山五十七世を董襲いたしました。

時あたかも日華事変が勃発し、私は陸軍砲兵少尉として召に応じ、南京、徐州など、中・北支の戦列に参加し、ひとたび内地へ帰還しましたが、陸軍の要請により、陸軍囑託として徴用され、ついで再び応召して、満州から南支、さらに南溟の地、西部ニューブリテン島へ転進、いくたびか身を生死の境に曝しながら各地に転戦して、昭和二十年八月、ラバウル地区で終戦を迎え、翌年五月に無事復員帰還いたしました。

かようなわけで、私が先師の行蹟を継いで当山の復興に専心従事できたのは、任職董襲後十年の歳月が過ぎてからであります。その頃、農地解放、預金封鎖などの施策により、せっかく先師が入手蓄積した田畑、山林や寺財のほとんどすべてが失われ、折からの物価高騰に、寺門の経営は未曾有の困難に逢着いたしました。昭和二十三年十二月二十五日には、先師の終生の大悲願であった「名越大本山」号の認証を京都総本山知恩院門跡岸信広猥下から受け、檀信徒の代表を帯同して祖山に登嶺、その認証式に参列できましたことは終生忘れられぬ感激であります。

以後、東奔西走、営々努力すること二十有余年、檀信徒のご協力のもとに、全山の環境整備から大殿の修覆、内陣諸莊殿の整備、大書院、庫裡、旧国宝の表門、通用門、県文化財の一切経堂の改修、観音堂の移転加築、寺務所の新築、大庭園の造成、参道、石段ならびに塀の修築、町水道の誘致、防火貯水大池、参詣者休憩所、納骨堂、開山上人廟ならびに歴代上人墓地、学頭墓地などの新築、改築に要した経費は巨額にのぼりました。山中

さらに、社会教化活動として、幼児の保育園、養護老人ホーム七井養老院、盲老人ホーム松ガ丘養荘の設立等の社会事業を起して、寺院の今後のあるべき姿勢を世に示し、ここに当山開基六百年祭を迎え得る態勢をつくり得ましたことは、まことに敬賀に堪えません。

この大沢叢書第一集「開山良栄上人略伝」は、私が二十数年前に執筆いたしましたもので、研究不足の点多々あるうかと思えます。また、地名等のその後の変更あることを知りながら、敢て刊行いたしました。

(合掌)